シギリヤ遺跡の庭園遺構

シギリヤ遺跡　インド亜大陸南東のインド洋上に浮かぶ島嶼国、スリランカ。その中央部に位置するシギリヤは、周囲の地表面から約200mの標高差をもつ巨大な岩塊がそびえたつ特異な景観で知られる（図54）。一帯には約5000年前にさかのぼる石器時代の遺跡や紀元前３世紀にスリランカに伝えられた仏教に関連する遺跡なども残るが、この場所で最も注目される遺跡が５世紀第４四半期のカーシャパ王の宮殿と都市の遺跡であることは誰もが認めるところであろう。

スリランカでは紀元前数百年にシンハラ族による統一的な国家が成立したと考えられ、紀元前４世紀に首都となったアヌラーダプラは長くその地位を保った。455年にアヌラーダプラで即位したダーツセーナ１世は灌漑池の造成などで農業生産力を高めたが、477年に息子のカーシャパの主導するクーデターによって王位を簒奪され、処刑される。カーシャパは、シギリヤに新たな宮殿を造営し、そこを首都とする。驚くべきことに、カーシャパが自らの玉座を築いたのは、かのそびえたつ岩塊シギリヤ・ロックの頂上であった。しかし、495年、カーシャパ王はインドに逃れていた腹違いの弟モッガラーナに攻め滅ぼされる。シギリヤはわずか11年で首都としての歴史を閉じ、以後はモッガラーナから寄進を受けた仏教僧によって維持されることとなる。そのシギリヤが再び大きな注目を集めることとなったのは、19世紀末のこと。イギリス人が、カーシャパ王の時代すなわち５世紀に描かれた、今日シギリヤ・レディと俗称される壁画を岩塊西面の岩肌で発見した時からである。その後、シギリヤは遺跡として考古学的な調査が続けられ、1982年には世界遺産リストに記載される。その年から「文化三角地帯プロジェクト」が開始され、シギリヤ遺跡でも宮殿区画と周囲の都市区画が合わせて調査対象とされた。そして、一連の調査の中で最も顕著な成果を見せたものの一つが、宮殿区画のうちシギリヤ・ロックの西側の低地部で全貌がほぼあきらかにされた庭園遺構である（巻頭図版１）。

庭園遺構とその整備　シギリヤ・ロックの西側、宮殿区画西部において、宮殿東西軸線上の中央通路に沿って水を自在に用いた庭園（水景園）が存在することが、発掘調査であきらかになった。まず、調査を主導したセナケ・バンダラナヤーケ氏の報告をもとに、現地で得た情報も加えながら、その概要を紹介しておこう。

水景園は、大きく４つの区画に分けられる（図55）。図上の「Ａ」で示されるのは、発掘調査によって初めてその存在があきらかになった「小水景園」である。東西30m、南北90mの大きさを持つこの小水景園は５つの小区画からなり、それぞれレンガ造建造物と建物の外周を囲うような池、ならびに蛇行して流れる水路で構成される（図56）。池や水路の底は石灰岩ないし大理石で舗装されており、水深が浅いとはいえ動きのある水は一帯の熱気を和らげるとともに、視覚的にも聴覚的にも心地よい環境を演出していた。なお、発掘調査がおこなわれたのは中央通路の南側のみであるが、おそらく北側にも同様の水景園が展開しているものと推測される。

「Ｂ」の「第一水景園」は、水景園の４つの区画の中では最大の面積を持つ。水深のある方形の池の中央に方形の島を置き、島から池を横断して四辺に通路が延びる四分区園（char bagh）の形式を持つ。その南と北にも長方形の池を多数備えた区画が連結する。四分区園部分はレンガ塀で囲われ、その塀が中央の島から延びる通路と交わるところには装飾的な門が配置されていた。

「Ｃ」の「第二水景園」は、噴水庭園とも呼ばれる。大きな島状台地（上面には建物群）を囲む濠に南北両側を挟まれた中央通路沿いの幅の狭い区画は、低い西部と高い東部に１mほどの段差で区分されている。東部の中央通路南側では、底面と縁石に大理石を用いた幅１mほどの浅い蛇行水路が発掘されており、これが東から西へと水を運ぶ役割を果たしていた。未発掘の通路北側もおそ

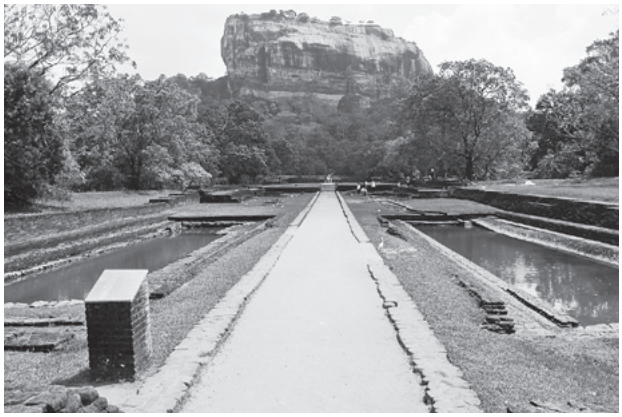

図54　第２水景園西端から見たシギリヤ・ロック

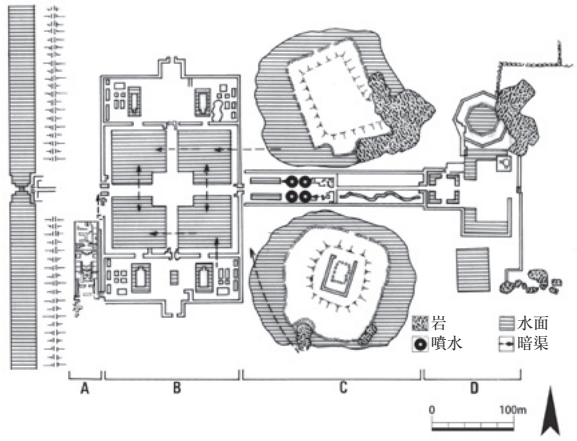

図55　シギリヤ遺跡水景園
（Sigiriya City, Palace and Royal Gardens所載図を一部修正）

図56　整備された小水景園（南から）

らく同様の構造であると考えられる。西部では、東部から受けた水と南北両側の濠から暗渠で引いた水をレンガ造の細い蛇行水路で西に流し、その流末を暗渠としたうえで、暗渠の始点近くと終点付近に穴の開いた円形の蓋石を置いて、その穴から水を噴出させる「噴水」の仕掛けとなっている。そこから地表に出た水はさらに西に流れて東西に細長い長方形池に入り、そこから「第一水景園」の四分区園のうち東側の二つの池に暗渠で流れ込む構造である。

「D」の「第三水景園」は東側に続く宮殿区画の入口前の庭園で、中央通路を挟んで南北両側にL字形の大きな池が配される。さらに、南L字池の南側には長方形の池、北L字池の北側には八角形の池が備わり、それぞれL字池への水の供給源となっている。

以上のように、シギリヤ遺跡の水景園を構成する4つの区画は規模や空間構成あるいは意匠において多様であるが、開渠や暗渠で相互に通水するなど、綿密な計画のもとに一体的に造営されたことはあきらかである。その水源は主に雨水とされるが、東が高い地形から考えて、第三水景園の長方形池や八角形池、第二水景園の島状台地周囲の濠には伏流水も流入しているものと思われる。

これらの水景園が5世紀第4四半期のカーシャパ王の時代のものであることは間違いない。そのデザインが依拠する思想などは定かでないが、中央通路を荘厳する装置であったことはあきらかである。また、複雑で精巧な水景園がこの時代に造営できた背景に、紀元前から営々と灌漑池の造成を続けてきたスリランカの農業水利技術があることも容易に想像できる。この点は、日本を含む世界の庭園、とりわけ水を主要な要素とする庭園の成立を考えるうえでも大きな示唆を与えるものであろう。

ところで、良好な状態で発掘された5世紀第4四半期築造のシギリヤ遺跡水景園は、その整備に関し中央通路の南と北で異なった取扱いをしている。南側では、復元的手法や露出展示を用いて築造当時の形態が視覚的に確認できる手法を採用しているのに対し、北側では「第二水景園」の一部などを除いて未発掘ないしは未整備のままで遺構を地中保存している。この手法は、平城宮跡の内裏や第二次大極殿・朝堂院地区で南北軸線西側を保存区とする調査・整備手法と同様の考え方にもとづく。

遺跡のマネジメント　シギリヤ遺跡のマネジメントについて、1997年にバンダラナヤーケ氏は、遺跡一帯の豊かな自然環境に対する干渉を最小限に抑えて生物多様性を保護すること、適正入場者数を守り遺跡の過剰な観光利用を抑制することなどを挙げた。現在、遺跡のマネジメントを担当しているのは、スリランカ中央文化基金（CCF）で、CCFは遺跡本体とともに、JICAの総合観光開発援助の一環で現地に建設されたシギリヤ博物館（2009年に開館）の運営も担っている。観光を重要な産業とするスリランカでも有数の観光資源であるシギリヤ遺跡は遺跡入場料（博物館入館料を含む）が30米ドルとかなりの高額であるが、入場者数は相当に多い。同博物館の学芸員クスムシリ・コディシワック氏によれば、2012年の遺跡入場者数はスリランカ人32万人、外国人23万人の計55万人、うち博物館への入館者数はそれぞれ5.7万人と3.1万人である。遺跡入場者数自体は1997年当時から大きな変化はないが、遺跡での特定時間帯における過剰利用緩和のためにも博物館見学を組み込んだルート設定に工夫が望まれるところである。最後に、発掘調査や整備の記録の蓄積と整理ならびにそれらの公開も今後の当遺跡のマネジメントの基盤としてきわめて重要であり、それらを担う人材の充実も不可欠であると感じたことを申し添えておきたい。

（小野健吉）

参考文献

Bandaranayake, S. “Sigiriya: Research and management at a fifth-century garden complex,” *Journal of Garden History*, vol.17 no.1, Taylor & Francis, 1997.
Bandaranayake, S. *Sigiriya: City, Palace and Royal Gardens*, Central Cultural Fund of Sri Lanka.